

政治上の発言を通訳する際のリスク管理

—記者会見の日英逐次通訳の考察を通じて—

松下佳世

(国際基督教大学)

Many factors influence the decision-making of interpreters in their selection of interpreting strategies, but “risk” has been pointed out by some researchers recently as having greater influence than previously understood. According to Pym (2015), problems that interpreters encounter during their performances vary in terms of levels of risk, which they manage by employing higher effort for high-risk problems and lower effort for low-risk problems. To investigate the possibility of such a correlation, the current research examines a televised press conference by a Japanese politician on a controversial issue that was interpreted into English. Interpreters in such situations face high risks not only because of the sensitive nature of the topics concerned, but also because their renderings are likely to be scrutinized by a large audience. Examples of “lengthening” by an interpreter are analyzed to explore the relationship between the level of effort exerted and the risks involved.

1. はじめに

会議通訳者が経験する多様な通訳現場の中でも、各国首脳による会見や政府間交渉など政治的な場面での逐次通訳は、通訳者にとって最もプレッシャーを感じるものの一つだろう。これまでの通訳研究において、同時通訳における認知的な制約とパフォーマンスの関係については、様々な検証がなされてきた(Gile, 1995/2009; Seeber, 2013; 水野, 2015)。しかし、政治家の発言を逐次通訳で訳す場合のように、権力者の目の前で衆人環視のもと通訳を行い、かつ、語られる内容が国益や国家機密にかかわるがゆえのリスクなど、認知的制約以外の要素が通訳者のパフォーマンスにどのような影響を与えているかについては、十分な研究が尽くされてきたとは言い難い(Baker, 1997)。通訳翻訳とリスクの関係については、近年になっていくつかの研究が相次いで発表されたが(Akbari, 2009; Hui, 2012, Matsushita, 2014, Pym, 2015)、中でも「リスク管理」の視点から通訳翻訳行為の分析を続けているアンソニー・ピムは、通訳者や翻訳者は訳出の際にリスク分析を行っており、リスクの度合いに応じてリスク回

MATSUSHITA Kayo, “Risk management in political interpreting: Case study of a press conference held in Japan,” *Interpreting and Translation Studies*, No.15, 2015. Pages 1-16. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

避やリスク転嫁、あるいはリスク・テイキングなどのリスク管理を行っている」と指摘している (Pym, 2005, 2014, 2015)。そこで本研究では、日本外国特派員協会における記者会見を事例として取り上げ、国益にかかわるような内容についての政治家の発言をメディアの前で逐次通訳する際、通訳者の訳出選択においてリスクがどのように影響しているのかを、主にピムの「リスク管理」の概念を指標として用いながら分析する。

2. 通訳翻訳とリスク管理

2.1 リスクの種類

通訳翻訳におけるリスク管理を論じた最新の研究である Pym (2015) は、通訳者や翻訳者が直面するリスクについて、三つに分類している。一つ目は「信用性リスク (credibility risk)」と名づけられた、通訳者、翻訳者が関係当事者 (クライアント、原発話者、聴衆等) から信用を失うリスクである。二つ目のリスクは「不確実性リスク (uncertainty risk)」と呼ばれ、特定の訳出について、どのように訳せばいいのか判断に迷うような、認知的なプロセスを含むリスクである。三つめの「コミュニケーション上のリスク (communicative risk)」はそのテキストが訳されるコンテキストにまつわるリスクで、訳出の選択を誤ればコミュニケーションの目的が達せられない可能性が生じるものは高リスク、そうでないものは低リスクとなる。例えば、ウルドゥー語で書かれたパキスタンの出生証明書をスペイン語に翻訳する際、本人の名前が正確に訳されていないと、その文書はある個人の出生の事実を証明するというコミュニケーションの目的を果たさないが、助産師の名前が誤って訳されていたとしても出生を証明するうえでは問題はない。このように、訳出においては全く難易度に差がない要素 (この場合はいずれも人名) であっても、誤って訳された場合のコミュニケーション上のリスクは異なるとピムは主張している (Pym, 2015, pp. 71-72)。

上記の定義を本研究の分析対象に当てはめてみると、三つの分類すべてにおいて高リスクな状況であることが分かる。まず、一つ目の信用性リスクについて見てみると、通訳者はこの種の業務を請け負うことによって、重要なクライアント (政府、自治体、政治家個人等) の信用を失うリスクと同時に、その訳出に直接、あるいは間接的に触れる可能性のある不特定多数の受け手の信用を失うリスクも否応なく引き受けることになる。また、二つ目の不確実性リスクについてだが、政治や外交においては「前向きに検討する」「事態を厳粛に受け止める」など、意図的にあいまいで不明瞭な言い回しをすることで、直接的な対立を避けたり、あるいは言質を取られないようにしたりすることも少なくないため、通訳者にとって原発話者の真意を汲み取りきれなかったり、これまでのいきさつを十分に分からないがゆえに適訳が出せなかったりするリスクは比較的高いといえる。三つめのコミュニケーション上のリスクについては、政治家にはそれぞれの政治的課題に対する信条やスタンスがあり、例えば一つの演説の中でも、リスク要素の高いものと低いものが混在していることは理解に難くない。また、国や個人の立場が対立している問題、その時々で世間の耳目が集まっている事象についての発言を訳す場合にも、リスクは高まると言えよう。Pym (op. cit., p. 73) によると、通訳者は信用性リスクと不確実性リスクについても常に意識はしているものの、実際の訳出においてリスク管理を行う上では、コミュ

コミュニケーション上のリスクが最も直接的な影響力が大きいという。よって本研究でもこのコミュニケーション上のリスクに特に着目しながら、事例分析を行うこととする。

2.2 リスクとエフォート

ここまでリスクの種類について見てきたが、ではいったい通訳者は具体的にどのようにリスク管理を行っているのだろうか。Pym (2015) によれば、それは、リスクの度合いに応じた「エフォート」¹の配分によって行われている。つまり、通訳者によって、よりリスクが高いと判断された場合には、より多くのエフォートが割かれ、よりリスクが低いと判断されたときは、あまりエフォートは割かれないという一種の合理的な意思決定を通訳者は行っているというのである。仮に、リスクが低い要素にエフォートを割きすぎた場合、それは、「過剰努力」であり、「非効率的」とみなされる。一方、リスクが高い要素にあまりエフォートを割かなかつたとすれば、「骨惜しみ」あるいは「当て推量」に過ぎないという(ibid., p. 73)。これらはいずれも初心者や、十分な知識と技能を持ち合わせていない訓練生等においては多く見られるものの、熟達者の判断としては合理性に欠けるとPymは指摘する。

プロの通訳者によるリスク管理という観点から分析に値するのは、「低リスク・低エフォート」、および「高リスク・高エフォート」の組み合わせである。Pym (loc. cit.) によると、前者のケースでは通訳者はリスク回避的となり、省略 (omission) や単純化 (simplification) といった比較的エフォートの低い方略を選択する傾向が見られる。一方、後者のケースで通訳者が選択する方略は外的・内的要因やコンテキストによって異なるため、一般化することは難しいという。例えば、直訳 (literal translation) は低リスク状況においては、低エフォート方略とみなされるが、高リスク状況においては、あえて分かりにくい表現を慎重に、そのまま逐語的に訳すことで原発話者へリスクを転嫁するという高エフォート方略にもなりうるのである。つまり、方略のみに着目して、高リスク環境における通訳者の高エフォートなリスク管理を分析することは難しく、ほかの指標を導入することが必要となる。

2.3 Lengthening

そこで本研究では、通訳者の訳出エフォートが高いことを表す現象として、逐次通訳における lengthening に焦点を当てる。Lengthening とは、通訳者の訳出が原発話よりも明らかに長くなることを指し、同時通訳に比べて時間的制約が比較的緩やかな逐次通訳において見られる現象である。明確な定義は管見の限り見当たらないが、先行研究においては、情報や説明を付加したり (addition)、同じような表現を繰り返したり (repetition)、あるいは原発話には暗示的にしか含まれていない事柄や因果関係を明示化したり (explicitation) といった訳出方略の結果として生じることが指摘されている (Berg-Seligson, 1990, Schäffner, 2012, Wadensjö, 2004)。

「高エフォート」な事例を抽出する上で lengthening に着目するのは、経験を積んだプロの通訳者は、特段の理由がない限り、逐次通訳において原発話よりも長い訳出を行うことは避けるという前提があるからである。これは、一つには通訳訓練における指導によるもので、例えば、

ヨーロッパにおける通訳訓練で長く教科書として使われてきた Herbert (1952, p. 67) を見ると、「逐次通訳は原発話者が使った時間の 75%以内に訳出を抑えなければならない」と明記されている。また、逐次通訳は聴衆が原発話と訳出をそれぞれ聞かなければならない点が負担となり、集中力の低下を招くことから、日本でもプロの通訳者の間では原発話よりも長い訳出は控えることが、一種の不文律となっている(松山, 2008)。言い換えれば、プロの通訳者にとって **lengthening** は、Chesterman (1997) が言うところの「プロフェッショナル規範」に対する逸脱行為であり、通訳者が逐次通訳においてこれを行う場合は「非常に特別な理由」(Herbert, loc. cit.) が必要となる。ゆえに、**lengthening** の事例を見ていくことで、通訳者にとっての「特別な理由」の一つとしてリスクの存在を浮かび上がらせことができるのではないか、というのが本研究の狙いである。

政治的な発言の逐次通訳における **lengthening** について言及している研究としては、2007年11月に行われた米独首脳会談後の共同記者会見の逐次通訳を分析した Schöffner (2012) がある。Schöffner (ibid.) は、メルケル独首相のドイツ語の発言が38ワードであったところを、通訳者が英語で81ワードを費やして訳出した例などを示し、このような記者会見におけるヘッジング(hedging)、繰り返し(repetition)、付加(addition)などによる **lengthening** は「訳出の方向や言語ペアにかかわらず」頻繁にみられる現象であること明らかにした(ibid., pp. 74-75)。その理由については、「リスク」という言葉は使っていないものの、誤解が生まれた場合の「潜在的な結果(potential consequences)」との表現を用いて、下記のように説明している。

この **lengthening** という現象が生じる一つの理由は、通訳者が(訳出を)原発話にできるだけ近づけようとするにある。このことは、通訳者が政治的対話のレベルの高さ、外交における言葉選びの難しさ、そして、誤解が形成された場合の潜在的な結果を認識していることを示している。(Schöffner, 2012, p. 76) [日本語訳引用者、以下同様]

ここまで、通訳行為には様々なレベルのリスクが存在すること、そのリスクに応じて、プロの通訳者は配分するエフォートを調節している可能性があることを Pym(2015) などの先行研究を通じて明らかにしてきた。また、「高リスク」環境下における「高エフォート」な訳出が想定される事例として、政治的な場面での逐次通訳における **lengthening** に着目することの妥当性についても論じてきた。次節では、日本外国特派員協会の記者会見とその日英逐次通訳を事例とした本研究の具体的な研究方法について詳述する。

3. 研究の目的と方法

高リスクな状況において、通訳者が訳出選択の際にリスク管理を行っているのかどうかを実際の事例を用いて検証するために、本研究では2013年5月に橋下徹・大阪市長(肩書きは当時。以下同様)が日本外国特派員協会で行った、従軍慰安婦問題についての記者会見における日英逐次通訳を取り上げる。具体的には、会見中の全参加者の発言(橋下市長、通訳

者、司会者、会場に集まった記者)を書き起こしてトランスクリプトを作り、後述する基準に基づいてlengtheningが見られた箇所を抽出したのち、起点テキスト(ST)と目標テキスト(TT)の比較によるテキスト分析を行った。その結果を、後日実施した、通訳者本人に対するインタビューの結果と照らし合わせ、さらに考察した。

数ある政治家による記者会見の中でこの事例を選んだのにはいくつかの理由がある。第一に、本研究の目的である「高リスク・高エフォート」の組み合わせを観察するには、通訳者にとってのリスクが非常に高い通訳環境で行われた素材を探す必要があった。そのためには、①政治家自身の知名度が高く、②メディアが注目するような論争性のあるテーマについての会見で、③通訳者の存在が可視化されている——など、いくつかの条件を満たすことが求められた。その点において、橋下徹・大阪市長は当時、「日本維新の会」という国会議員を擁する政党の共同代表を石原慎太郎・元東京都知事とともに務めており、知名度、メディアの関心ともに極めて高く、また、会見のテーマである従軍慰安婦問題も、韓国や中国などの近隣アジア諸国のみならず、広く欧米からも注目を集めていた。また、この会見は、橋下氏の従軍慰安婦問題に関する過去のいくつかの発言が不適切であったとのメディア批判に対する「釈明会見」の意味合いを含んだものであったため、会見場には内外のメディアが多数詰めかけていた。さらに、会見には複数のインターネットメディアも出席しており、その一部はライブ中継も行っていった。多くのカメラを向けられた状態で、通訳者は冒頭で名前を紹介されただけでなく、その姿も映像にとらえられており、通訳者の可視性は非常に高いものだった。

二点目として、lengthening を切り口に訳出エフォートを分析するためには、同時通訳ではなく逐次通訳の事例を取り上げる必要があった。これは前述のとおり、逐次通訳においては通常、原発話よりも短い訳出が前提とされているため、lengthening が起きていること自体に何らかの理由と通訳者の意図が存在すると考えられるからである。

三点目に、日英間の通訳の中でも、訳出の方向が日本語から英語への逐次通訳を対象としたかったことが挙げられる。これは、英語から日本語への逐次通訳における訳出時間を分析した松山(2008)において論じられているように、言語特性上、一般的に英語から日本語への訳出は原発話より長い時間を要する場合が少なくないことがすでに明らかになっており、リスク管理としての lengthening の事例を抽出する際に選別が難しいと考えたからである(尚、今回分析の対象とした通訳者は英語を母語としており、母語以外への訳出なので時間がかかるという理由は当てはまらない)。

四点目として、今回の事例のように、記者会見が開かれたこと自体がニュースになるような有力政治家の通訳は、十分な実力を持った通訳者が行うのが常であることも挙げられよう(Pöchhacker, 2012; Schäffner, 2012)。実際に、この会見を担当した通訳者は、日本外国特派員協会の名誉会員でもある経験豊富な通訳者であった。これにより、経験や能力の不足が原因で、原発話の意図を汲み取るのに時間がかかったり、簡単な訳出に手間取ったりといった、初心者にありがちなエラーと混同することなく、lengthening の事例を抽出することが可能となった。

次に、具体的な分析方法について説明する。本研究ではリスクとエフォートの相関関係を

見る目的のもと、以下の条件を満たすものを **lengthening** の事例として抽出した。まず、前提条件として、①ST 内の一つの単語に対応する単語が TT に二つ以上ある、②ST には存在しない、文節のレベルを超える情報が TT に含まれている——という二つの条件のいずれかを満たしたうえで、その理由が原発話のあいまいさや難解さといった ST に内在的な要因では説明が難しく、外在的な要因に起因していると考えられる十分な根拠がある場合に限定した。上記の手順でテキスト分析を行い、該当する **lengthening** の事例を特定したのち、この会見で逐次通訳を担当した通訳者に対するインタビューを実施した。

上述の通り、この会見を担当した通訳者は、冒頭に司会者から紹介されており、動画にも映っていることから、同協会の記者会見を数多く担当している、英語を母語とする日本人の通訳者であることが特定された。本研究では当初、テキスト分析のみを行う予定であったが、その後、この通訳者がインターネットメディアのインタビュー²に答え、橋下氏の会見も踏まえた発言をしているのを目にしたため、日本外国特派員協会を通じてこの通訳者に研究協力を依頼した。その後、承諾を得て 2014 年 11 月 9 日に約1時間の英語によるインタビューを行った。会見から一年半以上経ってしまっており、個別の訳出についての通訳者の記憶が十分ではなかったため、半構造化インタビューの手法を用い、前半は通訳者になったいきさつやこれまで担当した仕事について、後半は橋下氏の会見について質問する形を取った。かなりの時間が経っていたにもかかわらず、インタビューを実施したのは、Holland (2013, pp. 335–336)が指摘するように、テキスト分析など「プロダクト志向」のアプローチと、当事者インタビュー等を通じた「プロセス志向」の二つのアプローチを組み合わせることが、通訳者の意思決定過程を解き明かすには不可欠と考えたためである。このため、インタビュー結果は主たる分析対象とはせず、テキスト分析を補完するものとして扱った。

4. 事例分析

4.1 記者会見の概要

本研究で分析した事例は、東京都にある日本外国特派員協会において 2013 年 5 月 27 日に行われた橋下徹・大阪市長の記者会見である。同協会は、主に日本に拠点を置く外国人ジャーナリストからなる会員制の公益社団法人で、内外の政治家、経済人、評論家や芸術家などの著名人を招いて、海外発信のための記者会見を定期的実施している³。橋下市長の記者会見は、彼が会見の約二週間前、大阪市役所で記者のぶら下がり取材に応じた際、「銃弾が雨嵐のごとく飛び交う中で命をかけて走っていくときに、精神的にも高ぶっている猛者集団をどこかで休息をさせてあげようと思ったら、慰安婦制度は必要なのは誰だってわかる」などと発言したことや、米軍普天間飛行場を訪問した際、在日米軍司令官に「もっと風俗業を活用してほしい」と勧めたと明かしたことが日本メディアで大きく報じられ、その影響が海外にも波及したことから、外国メディアに自らの考えを直接伝える目的で開かれた。会見は同日午後、約二時間半にわたって日本語で行われ、同席した通訳者により、日本語から英語へ逐次通訳された。会見の様子はインターネット動画配信サービス「ニコニコ動画」によってライブ中継されたほか、録画されたビデオは地上波の放送局に加えて、YouTube などを通じて広く公開

された。本研究では、インターネット上で公開されている動画で会見の様子を確認するとともに、これをもとにした日本語と英語のトランスクリプトをつくり、STとTTを比較分析した⁴。

4.2 通訳者のプロフィール

次に、通訳者自身について、簡単に紹介する。本人によると、日本で生まれたものの、大学までの教育のすべてを米国で受けており、母語は英語である。もともとはピアニストを目指していたが、腱炎を患ってピアノから距離を置いていた時期に母国である日本を訪ねた際、親類から音楽関係の通訳を頼まれたことがきっかけで、この世界に足を踏み入れたという。その後は、クラシック音楽関係の米系企業の日本駐在として働き始め、夫の関西赴任や子育てを経て本格的にフリーランスの通訳者となった。いわゆる通訳訓練は受けておらず、自己流で通訳技術を身につけた一方、日本の老舗通訳学校であるサイマル・アカデミーでは、はじめはパブリック・スピーキングの講師として、その後は通訳者養成コースの講師として長年教えており、日本の通訳者育成の方法や、日本における通訳業界の現状には精通している。インタビュー実施時点で、フリーランスの通訳者として請け負っている仕事の半分はメディア関係であると回答しており、日本外国特派員協会においても過去十年以上にわたり、大勢の政治家の記者会見を担当した経験を持っている。

4.3 固有のリスク要因

事例分析の概要を確認したところで、この日の橋下市長の会見に特有と見られるリスク要因についてもまとめておきたい。通訳者の姿が動画でとらえられ、名前も冒頭に司会者によって紹介されたことはすでに述べたが、これは日本外国特派員協会の記者会見においては日常的に行われていることである。また、著名人の会見の場合は、前述のニコニコ動画などのインターネットメディアが生中継を行うこともはや一般的となっている⁵。

このように、日本外国特派員協会で記者会見の通訳をすること自体が、すでにリスクの高い状況であることに加えて、橋下市長の会見には二つの追加リスク要因があった。一つ目は、橋下氏が当時共同代表として率いていた政党「日本維新の会」に所属する衆議院議員である桜内文城氏が会見に同席していたことである。桜内氏は米ハーバード大学ケネディースクールで修士号(政治学)を修めており⁶、英語に堪能であることから、通訳者の訳出をチェックする言わば「モニター」⁷として、橋下市長が同行させたものと考えられる。実際、後述のとおり、会見中も何度か通訳者の訳出に対し訂正を求める場面があった。

イラクによるクウェート侵攻後まもなく英国の放送局ITNが行ったサダム・フセイン大統領へのインタビューにおける通訳の訳出について分析した Baker(1997, p. 114)は、ただでさえ、訳出に繊細な配慮が必要とされる政治的発言の通訳において、現場で、あるいはテレビ等のメディアを介して、このように様々な角度からパフォーマンスを監視されることは、通訳者にとって多大なストレス要因になると指摘している。フセイン大統領のケースでは、大統領自身が実際は英語を十分に理解する能力があったことから、大統領自ら通訳者の訳出をチェックする役割を果たしていたとベーカー (ibid.) は説明している。橋下市長の場合は、さらに別の人物

をこのモニター役に据えていたことが、通訳者にとってのリスクをさらに高めたと言える。

さらに、橋下市長の会見に特有であったのは、同氏が「私の認識と見解」と題する日本語の文書とその英訳 (A4判、各6ページ) を用意していたことである。これらは会見の冒頭に集まった記者に配布され、橋下氏自ら「日本語が分からない方は、僕の話よりも英文をしっかりと読んでください」と呼びかけると同時に、質問をする場合にはこの英文を読んだうえで行うよう釘を刺していた。これは、同氏が会見の中で繰り返し言及しているとおり、そもそもメディアの「誤報」によって自らの発言の意図が捻じ曲げられたとの認識から取った一種の自衛策であると考えられるが、このような発話者の「誤訳」に対する警戒心が、通訳者にとってさらなるプレッシャーになったであろうことは想像に難くない。これらの条件を総合的に勘案すると、橋下市長のこの日の会見は通訳者にとって非常にリスクの高いものであったと言える。

4.4 Lengthening の検証

ここからは、上述のような高リスク状況にあって、通訳者がどのような訳出を選択し、その意思決定の背景にどのような判断があったのかを、テキスト分析とインタビュー結果を交えながら見ていく。以下、STは橋下氏の発言、TTは通訳者の訳出である(下線筆者、以下同様)⁸。

一つ目の事例は、ST内の一つの単語が、TTでは複数の単語として訳出されている例である。

ST1: 報道の自由こそが権力をチェックする。

TT1: I believe that the freedom to report is a very very valuable concept because that is the only way one can check or curb or put restraints on state power.

TT1の前半に足されているように見える部分は、その直前の橋下氏の発言にあった「私は報道の自由を一番重要な価値だと考えています」を繰り返したもので、むしろ注目に値するのは後半である。ここでは、「チェック」という日本語での発言に対して、“check”、“curb”、“put restraints on”という三種類の英語表現が用いられている。チェックという言葉はそもそも英語であるため、通訳者も一旦は原発話者の使用した単語をそのまま英語として訳出したものの、日本語の文脈における「チェック」の使われ方と英語のニュアンスとの違いに違和感を覚えたためか、別の表現を二種類続けている。ここで、あえて通訳者が追加の-effortを割いて、より原文に近い表現を模索した背景には、これまでに見てきたように全般的に高リスクな状況に加えて、取り上げられている話題が、会見に参加している記者たちに直接かかわる問題であった点も無視できない。すなわち、「権力の監視」という報道機関にとって極めて重要な役割にかかわる部分であるがゆえに、「チェック」の訳出はこのコンテキストにおいて高いコミュニケーション上のリスクとなり、通訳者の高-effortな訳出を引き出したという見方もできるのである。

次も同じように一つの単語に複数の訳出が充てられている例だが、リスクを高めていると思われる外的要因は上記の例とは異なる。

ST2: ここが、韓国との間の一番の核心的な論点です。

TT2: In other words, this is the heart of the debate, the difference of opinion, the difference of stances and thinking between the Japanese and the South Korean governments.

ST2 の直前の部分で、橋下市長は従軍慰安婦の移送や慰安所の施設管理などにおいて国家の関与があったことは認めながらも、「国家の意思」として「組織的に」女性を人身売買したという証拠はないと強調し、そのような事実については「認めていないというのが日本の立場だ」と述べている。これが ST2 で言うところの「核心的な論点」であるわけだが、この点は同時に韓国からみれば最大の反論ポイントであり、通訳者の訳出にもこうしたコミュニケーション上のリスクを意識したような形跡が見て取れる。というのも、「核心的な論点」という言葉に対し、対応する三種類の英訳を出しているからで、最初の“the heart of the debate”が最も直訳的ながらも、話の流れ上やや日本側の主張の妥当性を強調した印象を与えるのに対し、続く“the difference of opinion”そして最後の“the difference of stances and thinking”と、徐々により中立的な表現へと変化している。

次の例も同様の論点について橋下市長が語っている部分だが、同じ主張を何度も繰り返すことは、受け手から見ると自己弁護をしているようにも感じられるため、映像からはこのあたりで会見の緊張感が増しているような印象が伝わってくる。その場において仲介役を担っている通訳者も、双方から誤解を招かぬようにしようという配慮からか、訳出のさらなる lengthening が生じている。

ST3: この国家の意思として、組織的に女性を拉致した、国家の意思として組織的に人身売買をしたという点が、おそらく世界のみなさんから、日本は特有だと非難される理由になっているかと思います。

TT3: The reason I am spending so much time on this point is that it is this argument that Japan, in Japan’s case, it was the will of the State to deliberately and organizationally and systematically engage in the abduction of women and the human trafficking of women. It is this point that seems, I think, in the eyes of the people of the world to separate Japan from all of the other nations and all of the other peoples of the world. It is the area that Japan is considered to be unique and peculiar and odd and different from everyone else.

TT3 の冒頭、通訳者は橋下氏が同じ話を繰り返していることを自覚しているようにとれる表現を加えることで、場に生まれた一種の緊張関係を緩和しようと追加的エフォートを割いているようにみえる。続く部分では、橋下氏が「国家の意思として」という表現を二度用いているのに対し、通訳者は同じ表現を繰り返すことは避け、拉致と人身売買を並べて表現するなどの

聞こえやすさの工夫を行っている。また後段、橋下氏が日本は世界から「特有だ」と非難されていると述べているくだりでは、「特有」という一言に対して、下線部にある四つの訳を出しているだけでなく、“separate Japan from all of the other nations and all of the other peoples of the world”といった ST3 にはもともと含まれていない表現を加えることで、ニュアンスを補っている。

通訳者にはそれぞれスタイルがあり、すべての通訳者が高リスクの場面でこのような付加を伴う訳出を行うわけではないだろう。しかし、複数の解釈が可能な単語や表現について、ST では一つの単語で表していたとしても、訳出の際に複数の選択肢を提示するという方法は、政治的な場面での通訳においては珍しくないようだ。例えば、Baker (1997, p. 116) は、前述のフセイン大統領のケースにおいて、通訳者は、自らが訳出を行う「コンテキストの重大性」と「何らかの誤解が生じたときの危険性」を認識しているがゆえに、責任を取らされることへの恐れから、「一つの訳出のみを選択するリスク」を避け、同義語や類義語を次から次へと繰り出すことで、原発話者の意図した意味を訳し漏らさないようにしていると分析している。ベーカーの言う「リスク」や「恐れ」が、ピムの言うところの「リスク」と重なると考えれば、同義語や類義語の羅列は、まさに通訳者によるリスク管理の表出であり、その結果 lengthening という現象が生じたと解釈することが可能になる。このような訳出方法は、Schäffner (2012) が分析した 2007 年の米仏首脳会談後の共同会見の通訳でも確認されており(例えば “convene elections” の直後に “call elections” を続けるなど)、この時にはサルコジ仏大統領がフランス語で 48 ワード語ったのに対して、通訳者の英語の訳出は 67 ワードに上ったと記録されている (p. 75)。

ST では一つの単語で表現されている場合でも、訳出においては複数の表現を出す結果、訳出全体が長くなること、すなわち本研究でいうところの lengthening について、橋下氏の会見を担当した通訳者も、前述のインターネットメディアのインタビューに対して以下のように説明している。

ひとつの訳がぴったりじゃなければ、できるだけたくさん訳します。聞いた人たちが「わかった」という顔をしてくださったなら、そこでストップするという感じなんですね。だから、通訳はみんな早口です。ときどき「どうして訳が長くなるのか」と聞かれるのですが、こういう背景があるんですね(永田, 2014)

この記事からも、通訳者自身が lengthening を自覚しているだけでなく、一定程度、意識的に行っていることがうかがえる。

橋下市長の会見におけるその他の lengthening の例としては、通訳者が英訳の際にあえてもとの日本語を繰り返すケースも見られた。

ST4: ただ、この慰安婦問題に関して、不合理な議論はもう終止符を打つべきだと思っています。

TT4: Having said all of this however, I believe that we have now reached a point in time where we should perhaps put an end to what I would call *fugori* is the word that the mayor is using... perhaps irrational, or unreasonable arguments or debates.

ここでは、日本語の「不合理」という言葉を繰り返したうえで、通訳者が原発話者の発言を一人称で訳すという役割から離れ、自らの訳出に説明を加えている。さらには、その訳についても選択肢を二つ提示するといった形で、全体として非常に高いエフォートを割いている。このような訳出の選択について、この通訳者は本研究のためのインタビューの中で次のように述べている。

リスク管理については常に、とても意識しています。だからこそ、聞いているかもしれないすべての人が納得するように、異なる訳をたくさん出しているのです。常に心がけているのは、最初に公式訳 (official translation) を出すこと、そして、それでは十分に分からない、説明が足りないという人のために、ほかの訳を次々に出します。その際には、度が過ぎないように注意しています。(中略)もし、やり過ぎたかもしれない、あるいは間違えたかもしれないと気づいたときには、その都度謝るようにしています。そうすることで、通訳者に対する信頼感が醸成されると思うからです⁹。

この発言からは、政治的な場面で通訳をする通訳者がいかに自分の直面しているリスクを認識し、リスク管理の意識をもって訳出を選んでいるかがはっきりと伝わってくる。

最後の例は、そうした通訳者のリスク管理にも拘らず、特定の訳出がモニター(桜内議員)によって問題視され、通訳を中断させられた一連の流れを示したものである。この会見において、通訳者の置かれている状況のリスクの高さとともに、原発話の中の一つの単語が極めて高リスクとなりうる事が明確に示されている一例と言えよう。

ST5: 先ほど、記者からご質問ありましたが、日本の慰安所は軍が管理していたことは間違いありません。

TT5: In response to a previous question from the floor, I mentioned a few moments ago that there is no doubt but that these facilities—which were called comfort stations in Japanese—there is no doubt that they were run by the government.

ST6: これは様々な理由がありますが、これは、歴史的な、歴史学者にゆだねたいと思います。

TT6: Excuse me, and the interpreter would like to correct her choice of words because it is very sensitive issue. They were managed. *Kanri* is the word that he was using, by the government.

ST7: ただ、軍が管理していたこの日本の施設も、

TT7: But in regard to these facilities which were managed by the military,

ST8: 民間業者が管理している施設も

TT8: whether they were managed ... Mr. Sakurachi doesn't seem to like the word managed. [小声で日本語でのやりとり] So excuse me, this is a very very delicate and sensitive issue. The original word that is being used is kanri, which can be translated as being in charge of or being ... looking after the facility. But it can also be used as, interpreted to mean operate, which Mr. Sakurachi feels is an inappropriate word. But manage in terms of the facility is being looked after by the military, that has been acknowledged, but whether it was the military that has been involved in this or whether it was a private broker that was involved in this,

ST9: その施設の中で行われている現状は、大変不幸なことであることに変わりはありません。

TT9: The point that I'm making is that whether it was managed or looked after by military organization or by private person or organization, the point is, what happened in those facilities was ... were things that were very very tragic and full of great suffering.

このように通訳者が自らの訳出に説明を加える様子は、通常の会議通訳などでは頻繁に目にするのではないが、こうした対応や、あるいは「管理」という言葉に対して何度も繰り返し違う訳語を充てるといった高エフォートな訳出も、通訳者が置かれている高リスクな状況や、「管理」という言葉がこのコンテキストの中で持つあいまいで限定的な意味合いを併せて考えれば、一定の説明がつく。繰り返しの引用になるが、Baker (1997) で取り上げたフセイン大統領の通訳も、自らの “helpless” という訳出をめぐり、その意味するところや選んだ根拠を説明する場面がみられた (p. 118)。この点について Baker (ibid., p. 123) は、通訳者がフセイン大統領の発言を正確に訳していなかったとして糾弾されるなど「あらゆる責任」を逃れるために行っているものと分析している。これもまた、このアラビア語の通訳者によるリスク管理として説明することが可能である。

通訳者がこうしたリスク管理を行うのは、世界の報道機関の関心を集めるようなニュースの場合、通訳者の訳出ミスが大きく「誤訳」として取り上げられ、時には通訳者のキャリアに大きく傷がついたり、クライアントを失ったりする例が決して少なくないことも原因に挙げられよう。橋下氏の通訳者も過去の苦い経験について、本研究のためのインタビューで以下のように述べている。

最初に日本外国特派員協会から直接お受けした仕事は、りそな銀行の会長の講演だったと

思います。(中略)翌日、フィナンシャル・タイムズが記事を載せていて、「(会長は)これこれと言った」と書いているのを見て、私は「それは違う。事実として誤っている。それを言ったのは通訳者(である私)だ」と思いました。通訳者を通して彼が語ったと言うのならその通りかもしれないけれど、彼が直接言った訳ではない。引用符の中に入っているわけではない、と感じました¹⁰。

つまり、こうした経験の積み重ねが、特に政治的発言の通訳を担う通訳者にリスクの存在を強く認識させ、意識的にせよ、無意識にせよ、訳出におけるリスク管理を行わせているのではないかと推察される。

5. まとめ

本研究では、通訳者の訳出選択において、リスクが一定の影響を及ぼしているのではないかとの仮定に基づき、あえて極めて高リスクと思われる政治的発言の通訳を事例として取り上げることで、lengthening という現象を切り口に検証を試みた。その結果、少なくとも 2013 年に行われた橋下徹・大阪市長の記者会見の通訳においては、リスクの高い状況や要素と呼応するような形で、通訳者が情報や説明の付加という高エフォートな方略を用いており、その結果 lengthening 現象が頻繁に起きていることが明らかになった。また、通訳者自身もリスクの存在を認識しており、リスク管理を意識しながら訳出を選択している場合があることも、インタビューを通じて浮かび上がってきた。言うまでもなく、たった一つの事例分析をもって、通訳研究におけるリスク管理という概念の適応可能性を論じることはできないが、すでに先行研究で取り上げられてきたアラビア語と英語 (Baker, 1997)、ドイツ語と英語、フランス語と英語 (Schäffner, 2012) の事例だけでなく、今回、日本語と英語の間の政治的な通訳においても、リスク管理の概念を使うことで説明可能な共通項が複数確認されたことは、今後の研究の発展のためにも貴重な発見であったと言える。現在、複数の研究者とともに、日本で開かれている様々な記者会見の会見内容(原発話)と通訳者の訳出をコーパス化するプロジェクトに取り組んでおり、このコーパスを活用することで、英語から日本語への訳出も含めたより多くの事例を網羅的に分析できるものと期待している。

また、記者会見から月日が経ってしまったために、個別の訳出について詳しく考えを聞き出すことができなかったものの、通訳者のインタビューも併せて実施したことには、一定の意義があったと思われる。前述の松山(2008)に見られるように、プロの通訳者による実験データを分析したり、実践結果をインタビューと組み合わせたりした研究は少なくないが、リスク管理のように、STとTTを比較するだけでは十分な分析が難しいテーマについては、実際の現場で訳出を行った通訳者にその内容についてのインタビューを行う今回のような手法が有効なのではないかと感じた。さらに、本研究では「高リスク・高エフォート」の組み合わせの事例を見ることで、ピムの指摘するようなリスク管理に基づく相関関係が見いだせるかに焦点を当てたが、もし、そのようなリスク管理が行われているとするならば、「低リスク・低エフォート」の組み合わせにおいても、事例分析による検証が可能ではある。リスク管理という概念自体がまだ理論化の途

上にあり、十分な実証研究が行われているとは言い難いなか、新たなリスク状況に焦点をあてたものも含めて、日本からの貢献を続けていくことが必要だろう。

また、今回分析の切り口として着目した逐次通訳における **lengthening** という現象についても、さらなる研究の可能性があると思われる。今回はピムのリスク管理の概念を用いたため、リスクとエフォートの相関関係を中心的に見たが、会見全体を通じたワード数や訳出時間を比較することでも新たな発見があるかもしれない。ただ、通訳研究において今後 **lengthening** に着目した研究を行うならば、より明確な定義や概念整理が必要と思われる。いずれも、今後の課題としたい。

最後に、今回は政治的な記者会見の通訳を事例として取り上げたが、有力政治家の発言はどのような場で発せられたとしても、多くの場合広くメディアを通じて報じられることから、外国語がかかわるときには「メディア通訳」としての側面も併せ持つ。メディア通訳についてはこれまで、テレビのニュース番組における放送通訳の研究は活発になされてきたが、インターネットの普及と技術革新により、メディアを介した通訳の機会や方法は多様化している (Pöchhacker, 2012, p. 124)。今後のメディア通訳、あるいはより広義のニュース・トランスレーション研究の発展のためにも、これまで中心的に扱われてきた放送通訳などの同時通訳ではなく、逐次通訳に焦点を当てた本研究が多少なりとも貢献できたことを願う。

.....

【著者紹介】

松下佳世 (MATSUSHITA Kayo) 国際基督教大学准教授。朝日新聞記者、サイマル・インターナショナル専属通訳者を経て、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程で通訳翻訳研究を学ぶ。専門はニュース・トランスレーション。

.....

【註】

1. ここでの「エフォート」はダニエル・ジルの「努力モデル」(Gile, 1995)における effort と区別するため、「努力」ではなくカタカナ表記とした。
2. BLOGOS のホームページ[Online] <http://blogos.com/article/85539/>(2015年7月31日)を参照。
3. 日本外国特派員協会の公式ホームページ[Online] <http://www.fccj.or.jp>(2015年7月31日)による。
4. 動画は本稿執筆時点(2015年7月31日)で複数のバージョンが YouTube 上で確認できる。トランスクリプトの作成に当たっては、ニュース専門メディア局ビデオニュースドットコムが YouTube にアップロードした動画[Online] <https://www.youtube.com/watch?v=Ba0P8Mx-VpU>(2013年7月8日)を使用した。
5. 同協会は2013年9月ごろから会見のライブストリーミング映像を自ら発信しており、現在ではほぼすべての会見が生中継の形でインターネット視聴できるようになっている。

6. 桜内文城氏の公式ホームページ[Online] <http://www.sakurauchi.jp/profile/index.html> (2015年7月31日)による。
7. 訳出をチェックする第三者の存在が通訳者のパフォーマンスに与える影響については、東京裁判におけるモニターの役割を論じた武田(2008)に詳しい。
8. 書き起こしに際しては可読性を重視し、本研究では分析の対象としない冗語や言い直し、言いよどみは省略した。
9. 本研究の通訳者インタビューは英語で行ったものを、筆者が日本語に訳した。
10. 同上。

【参考文献】

- Akbari, M. (2009). Risk management in translation. In H. C. Omar, H. Haroon & A. A. Ghani (Eds.), *The sustainability of the translation field: The 12th International Conference on Translation* (pp. 509–518). Kuala Lumpur, Malaysia: Persatuan Penterjemah Malaysia.
- Baker, M. (1997). Non-cognitive constraints and interpreter strategies in political interviews. In Simms, K. (Ed.) *Translating sensitive texts: Linguistic aspects* (pp. 111–129). Amsterdam, Netherlands: Rodopi.
- Berk-Seligson, S. (1990). *The bilingual courtroom: Court interpreters in the judicial process*. The University of Chicago Press.
- Chesterman, A. (1997). *Memes of translation: The spread of ideas in translation theory*. Amsterdam, Netherlands: John Benjamins.
- Gile, D. (1995/2009). *Basic concepts and models for interpreter and translator training*. Amsterdam, Netherlands: John Benjamins.
- Herbert, J. (1952). *The interpreter's handbook: How to become a conference interpreter*. Geneva, Switzerland: Georg.
- Holland, R. (2013). News translation. In C. Millán & F. Bartrina (Eds.), *The Routledge handbook of Translation Studies* (pp. 332–346). Abingdon, United Kingdom: Routledge.
- Hui, T. T. (2012). *Risk management by trainee translators: A study of translation procedures and justifications in peer-group interaction* (Doctoral dissertation, Rovira i Virgili University, Tarragona, Spain).
[Online] <http://isg.urv.es/publicity/doctorate/research/hui.html> (2015.1.31)
- Matsushita, K. (2014) Risk management as a theoretical framework for analyzing news translation strategies. *Invitation to Translation Studies*, 12, 83–96.
- Pöschhacker, F. (2012). Obama's rhetoric in German: A case study of inaugural address. In B. Adab, P. A. Schmit & G. Shreve (Eds.) *Discourses of translation. Festschrift in*

- honour of Christina Schäffner* (pp. 123–138). Frankfurt, Germany: Peter Lang.
- Pym, A. (2005). Text and risk in translation. In K. Aijmer & C. Alvstad (Eds.), *New tendencies in translation studies* (pp. 69–82). Gothenburg, Sweden: Göteborg University.
- Pym, A. (2014). *Risk analysis as a heuristic tool in the historiography of interpreters: For an understanding of worst practices*. [Online]
http://usuaris.tinet.cat/apym/on-line/research_methods/2014_history_interpreting.pdf
(2015.1.31)
- Pym, A. (2015). Translating as risk management. *Journal of Pragmatics*, 85, 67–80.
- Schäffner, C. (2012). Press conferences and recontextualization. In I. Alonso, J. Baigorri, & H. Campbell (Eds.), *Ensayos sobre traducción jurídica e institucional: Essays on legal and institutional translation* (pp. 69–84). Granada, Spain: Editorial Comares.
- Seeber, K. G. (2013). Cognitive load in simultaneous interpreting: Measures and methods. *Target*, 25(1), 18–32.
- Wadensjö, C. (2004). Dialogue interpreting: A monologising practice in a dialogically organized world. *Target*, 16(1), 105–124.
- 松山晶子 (2008). 「英日逐次通訳とノートテイキング: 訳出時間に着目した考察」『通訳翻訳研究』第8号, 1–18頁.
- 水野的 (2015). 『同時通訳の理論: 認知的制約と訳出方略』朝日出版社.
- 永田正行 (2014). 「アントニオ猪木の『元気ですかー!』はどうやって英語に訳すのか?」『BLOGOS』 [Online] <http://blogos.com/article/85539/?p=2> (2015年7月31日)
- 武田珂代子 (2008). 『東京裁判における通訳』みすず書房.